



博物館と災害資料 : 地域博物館の試み

水本, 有香

(Citation)

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 10:32-32

(Issue Date)

2012-01-29

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003761>



博物館と災害資料-地域博物館の試み-

伊丹市立博物館 震災資料調査員

水本 有香

0. 本日のポイント

- ①なぜ博物館が？
- ②なぜ阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）を？
- ③なぜ伊丹で？

1. なぜ博物館が？

- ・震災資料は「ない」
⇒市役所総務課、人と防災未来センター資料室、神戸大学附属図書館震災文庫の所蔵資料を活用
- ・被災史料は「ある」
⇒史料ネットによる被災史料のレスキュー、博物館における資料整理→被災史料の企画展
- ・所蔵資料、地元におけるネットワークは「ある」
⇒例；字限図、自治会・農会・水利組合等のネットワーク、美術館・昆虫館等のネットワーク

2. なぜ阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）を？

- ・「周辺被災地」の特徴・役割
⇒ヒト・モノの出入り（大阪国際空港、陸上自衛隊、国道171号線、JR、仮住まいなど）
- ・新たな認識（既存の阪神・淡路大震災のイメージを覆す）
⇒伊丹から中心被災地へ支援に行く（消防、ボランティアなど）
⇒市内のボランティア（伊丹市民自身も多く担っていた）
⇒市に届いた支援物資（伊丹市民自身も多く送っていた）

3. なぜ伊丹で？

- ・阪神・淡路大震災による被害（伊丹市と神戸市）
- ・被害がなかったわけではない、大きかったわけでもない、被害が大きいところに目が行きがち
⇒ひどくないところにも被害がある（＝周辺被災地⇔中心被災地）
⇒その土地の持つ歴史、特徴（1994年9月の伊丹豪雨、関西国際空港の開港）
⇒復旧、復興の手法、スピードが異なる（避難所、仮設住宅など）
⇒経験した震災体験も異なる（記録していかないとなくなってしまう→聞き取り事業）

4. 地域博物館として

- ・聞き取り事業、伊丹震災史検討会、企画展、『阪神・淡路大震災 伊丹からの発信 手引・資料編』
同時代でありながら17年前、双方向性（つぶやきコーナー、大学生による写真キャプションなど）
⇒どこで何があったのか、まだ分からないことがたくさんある、説明しないと通じないことがある
- ・災害資料は生まれ続けている
⇒阪神・淡路大震災以前・以降の自然災害、東日本大震災（伊丹市として支援する側）